あきあはせ

樋口一葉

あやしうつむりのなやましうて、夢のやうなるきのふ今日、うき世(よ)はしげるわか葉(ば)のかげに、初(はつ)ほとゝぎすなきわたる頃(ころ)を、こその秋袷(あきあはせ)ふるめかしう取出(とりいで)ぬる、さりとは心もなしや。垣(かき)の竹(たけ)の子(こ)きぬゝぎすてゝ、まき葉(は)にかゝる朝露の新らしきを見るもいと恥かしうこそ。

雨(あめ)の夜(よ)

庭の芭蕉(ばせを)のいと高やかに延びて、葉は垣根(かきね)の上やがて五尺(ごしやく)もこえつべし。今歳(ことし)はいかなれば、かくいつまでも丈(たけ)のひくきなど言ひてしを、夏の末(すゑ)つかた極(きは)めて暑かりしに唯(ただ)一日(ひとひ)ふつか、三日(みつか)とも数へずして驚くばかりになりぬ。秋(あき)かぜ少しそよ〳〵とすれば、端(はし)のかたより果敢(はか)なげに破れて、風情(ふぜい)次第に淋(さび)しくなるほど、雨(あめ)の夜(よ)の音(おと)なひこれこそは哀れなれ。こまかき雨ははら〳〵と音して草村(くさむら)がくれ鳴(なく)こほろぎのふしをも乱さず、風一(ひと)しきり颯(さつ)と降(ふり)くるは、あの葉にばかり懸(かか)るかといたまし。

雨は何時(いつ)も哀れなる中に秋はまして身にしむこと多

かり。更(ふ)けゆくまゝに燈火(ともしび)のかげなどうら淋しく、寝られぬ夜なれば臥床(ふしど)に入(い)らんも詮(せん)なしとて、小切(こぎ)れ入れたる畳紙(たたうがみ)とり出だし、何(なに)とはなしに針をも取られぬ。まだ幼(いとけ)なくて伯母(をば)なる人に縫物ならひつる頃、衽先(おくみさき)、褄(つま)の形(なり)など六(む)づかしう言はれし。いと恥かしうて、これ習ひ得ざらんほどはと、家に近き某(それ)の社(やしろ)に日参(にっさん)といふ事をなしける、思へばそれも昔しなりけり。をしへし人は苔(こけ)の下になりて、習ひとりし身は大方(おほかた)もの忘れしつ。かくたまさかに取出(とりいづ)るにも指の先こわきやうにて、はか〴〵しうは得(え)も縫(ぬ)ひがたきを、かの人あらばいかばかり言ふ甲斐(かひ)なく浅ましと思ふらん、など打

返しそのむかしの恋しうて、無端(そゞろ)に袖(そで)もぬれそふ心地す。

遠くより音して歩(あゆ)み来(く)るやうなる雨、近き板戸に打(うち)つけの騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老(おい)たる親の痩(や)せたる肩もむとて、骨の手に当りたるも、かかる夜(よ)はいとゞ心細さのやるかたなし。

月(つき)の夜(よ)

村雲(むらくも)すこし有るもよし、無きもよし。みがき立てた

るやうの月のかげに尺八（しやくはち）の音（ね）の聞えたる、上手（じやうず）ならばいとをかしかるべし。三味（さみ）も同じこと、琴（こと）は西片町（にしかたまち）あたりの垣根（かきね）ごしに聞（きき）たるが、いと良き月に弾く人のかげも見まほしく、物がたりめきて床（ゆか）しかりし。親しき友に別れたる頃（ころ）の月、いとなぐさめがたうもあるかな。千里（ちさと）のほかまでと思ひやるに、添ひても行（ゆか）れぬ物なれば唯（ただ）うらやましうて、これを仮に鏡となしたらば、人のかげも映るべしやなど、果敢（はか）なき事さへ思ひ出でらる。

　さゝやかなる庭の池水（いけみづ）にゆられて見ゆるかげ物いふやうにて、手すりめきたる所に寄りて久しう見入るれ

ば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底ふかく、この池の深さいくばくとも量(はか)られぬ心地になりて、月はそのそこの底のいと深くに住(すむ)らん物のやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見るに、空なる月と水のかげと孰(いづ)れを誠(まこと)のかたちとも思はれず。物ぐるほしけれど箱庭に作りたる石一つ水(みづ)の面(おもて)にそと取落せば、さゞ波(なみ)すこし分れて、これにぞ月のかげ漂ひぬ。かくはかなき事して見せつれば、甥(をひ)なる子の小さきが真似(まね)て、姉(あね)さまのする事我(わ)れも為(す)とて、硯(すずり)の石いつのほどに持(も)て出でつらん、我れもお月さま砕くのなりとて、はたと捨てつ。それは亡き兄の物なりしを身に伝へてい

と大事と思ひたりしに、果敢なき事にて失なひつる罪得がましき事とおもふ。この池かへさせてなど言へども、まださながらにてなん。明ぬれば月は空に帰りて余波もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん、夜な〳〵影や待とるらんと哀なり。

　嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなどある人の心安げに訪ひ寄たる。男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば、いかばかり嬉しからん。みづから出るに難からば文にてもおこせかし。歌よみがましきは憎くき物なれど、かかる夜の一ト言には身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占うりのこゑ、

汽車の笛の遠くひゞきたるも、何（なに）とはなしに魂あくがるゝ心地す。

雁（かり）がね

朝月夜（あさづくよ）のかげ空に残りて、見し夢の余波（なごり）もまだ現（うつつ）なきやうなるに、雨戸あけさして打（うち）ながむれば、さと吹く風竹（たけ）の葉（は）の露を払ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折（をり）しも、落（おち）くるやうに雁がねの聞えたる、孤（ひと）つなるは猶（なほ）さら、連ねし姿もあはれなり。思ふ人を遠き県（あがた）

などにやりて、明くれ便りの待わたらるゝ頃、これを聞たらばいかなる思ひやすらんと哀れなり。朝霧ゆふ霧のまぎれに、声のみ洩らして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音きこえて、月すむ田面に落らんかげ思ひやるも哀れ深しや。旅寐の床、侘人の住家、いづれに聞ても物おもひ添ふる種なるべし。

一とせ下谷のほとりに仮初の家居して、商人といふ名も恥かしき、唯いさゝかの物とり並べて朝夕のたつきとせし頃、軒端の庇あれたれども、月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家の二階のはづれを僅かにもれ出る影したはしく、大路に立て心ぼそく打あふぐに、

秋風たかく吹きて空にはいさゝかの雲もなし。あはれかかる夜よ、歌よむ友のたれかれ集ひて、静かに浮世の外の物がたりなど言ひ交はしつるはと、俄かにそのわたり恋しう涙ぐまるゝに、友に別れし雁唯一つ、空に声して何処にかゆく。さびしとは世のつね、命つれなくさへ思はれぬ。擣衣の音に交りて聞えたるいかならん。三つ口など囃して小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしう聞ゆるやと浦山しくなん。

虫の声

垣根の朝顔やう〱小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花みゆるも、そのはじめの事おもはれて哀れなるに、松虫すゞ虫いつしか鳴よわりて、朝日まちとりて竈馬の果敢なげに声する、小溝の端、壁の中など有るか無きかの命のほど、老たる人、病める身などにて聞たらば、さこそ比らべられて物がなしからん。まだ初霜は置くまじきを、今年は虫の齢ひいと短かくて、はやくに声のかれ〲になりしかな。くつわ虫はかしましき声もかたちもいと丈夫めかしきを、何しか時の間におとろへ行くらん。人にもさる類ひはありけりと

をかし。鈴虫はふり出(いで)てなく声のうつくしければ、物ねたみされて齢(よはひ)の短かきなめりと点頭(うなづ)かる。松虫も同じことなれど、名(な)と実(じつ)と伴はねばあやしまるゝぞかし。常盤(ときは)の松を名に呼べれば、千歳(ちとせ)ならずとも枯野の末まではあるべきを、萩(はぎ)の花ちりこぼるゝやがて声せずなり行く。さる盛りの短かきものなれば、暫時(しばし)も似(あへ)よとこの名は負(おは)せけん、名づけ親ぞ知らまほしき。

この虫一(ひと)とせ籠(こ)に飼ひて、露にも霜にも当てじといたはりしが、その頃(ころ)病ひに臥(ふ)したりし兄の、夜(よ)なく〳〵鳴くこゑ耳につきて物侘(ものわび)しく厭(いと)はしく、あの声なくは、この夜(よ)やすく睡(ねむ)らるべしなど言へるも道理(ことわり)にて、いそ

ぎ取おろして庭草の茂みに放ちぬ。その夜なくやと試みたれど、さらに声の聞えねば、俄かに露の身に寒く、鳴くべき勢ひのなくなりしかと憐れみ合ひし、そのとし暮れて兄は空しき数に入りつ。又の年の秋、今日ぞこの頃など思ひ出る折しも、ある夜ふけて近き垣根のうちにさながらの声きこえ出ぬ。よもあらじとは思へど、唯そのものゝやうに懐かしく、恋しきにも珍らしきにも涙のみこぼれて、この虫がやうに、よし異物なりとも声かたち同じかるべき人の、唯今こゝに立出で来たらばいかならん。我れはその袖をつと捉らへて放つ事をなすまじく、母は嬉しさに物は言はれで涙のみ

ふりこぼし給ふや、父はいかさまに為(な)し給ふらんなど怪しき事を思ひよる。かくて二夜(ふたよ)ばかりは鳴きつ。その後(ご)は何処(いづこ)にゆきけん、仮にも声の聞えずなりぬ。

今も松虫の声きけばやがてその折おもひ出(いで)られて物がなしきに、籠(こ)に飼ふ事は更(さら)にも思ひ寄らず、おのづからの野辺(のべ)に鳴弱(なきよわ)りゆくなど、唯(ただ)その人の別れのやうに思はるゝぞかし。

底本：「全集樋口一葉　第二巻　小説編二〈復刻版〉」
小学館
１９７９（昭和54）年10月1日第1版第1刷発行
１９９６（平成８）年11月10日復刻版第1刷発行
※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。
「雨の夜」（入力：加藤恭子　、校正：浦田伴俊）
「月の夜」（入力：葵、校正：もりみつじゅんじ）
入力：もりみつじゅんじ
校正：浅原庸子
２００３年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。